

第5章 形容詞

■形容詞の特質とその種類

(1) 形容詞の特質

多くの文法書は形容詞の特質として次の①～④の4項目をあげている。

- ① 形容詞は冠詞と名詞の間に置かれる。
- ② 形容詞は be 動詞などの補語になる。
- ③ 形容詞は very で修飾される。
- ④ 形容詞は比較変化をする。(比較変化をしない形容詞もある。)

(2) 形容詞の分類

形容詞は大きく分類して、①**性状形容詞**と②**数量形容詞**とに分けることができるが、他に代名詞が形容詞の働きをする場合がある。それを③**代名形容詞**という。性状形容詞とは、事物や人の性質・状態・様態などを表す形容詞で、大小・高低・長短・新旧・感情・色合・国籍などを表す。形容詞の中心的存在と言える。一方の数量形容詞は、数・量・程度を表すもので、数詞と不定数量形容詞とがある。(この章では不定数量形容詞だけを扱い、数詞については別に章を設けて説明する。)例えば、「その3つの全ての小さな古い石の橋」というのは、英語で、“all the three small old stone bridges”となるが、all, three, small, oldが形容詞ということになる。

代名詞の形容詞的用法	冠詞	数詞	形容詞	形容詞	名詞の形容詞的用法	修飾される名詞
all	the	three	small	old	stone	bridges

Dr. Higgins's room

《広義的な形容詞の範疇》広義的な形容詞の解釈として、「名詞を修飾していれば、その語は形容詞である」という考え方がある。そういう意味で言えば、上例、“all the three small old stone bridges”「その3つの全ての小さな古い石の橋」という表現で、冠詞の“the”も名詞の“stone”も“bridges”を修飾しているという点で形容詞であるという考え方である。

(3) 形容詞の働き

名詞に直接付いて修飾する働きを**限定用法**という。一方、述部の一部として間接的に名詞と結びつく働きを**叙述用法**という。

01. **This is an interesting** book. [限定用法]

(これは面白い本です。)

02. This book **is interesting**. [叙述用法]

(この本は面白いです。)

(4) 形容詞の語順

名詞を形容詞で修飾する場合、下の①～③の順番については決定的であるが、④については若干のゆれはある。

- ① まず、全ての形容詞に先立ち **all** と **both** と **half** は置かれる。
- ② 冠詞とそれに相当する限定詞 (**my** などの所有格、**this** などの指示代名詞、**some** などの不定代名詞などのこと) はその次に置かれる。
- ③ 数量を示す形容詞はその次に置かれる。
- ④ 性質や状態を示す形容詞が置かれる。

評価⇒寸法⇒年齢・温度⇒形状⇒色彩⇒分詞⇒出所・材料⇒動名詞⇒名詞

Dr. Higgins's room

名詞の前に置かれる形容詞の語順は、一般的に意味上名詞との関係が薄いものほど名詞から離し、濃いものほど名詞に近いところに置く傾向があるが、性状形容詞の語順については決定的なものではなく、全体の口調や個人の好みによっても異なる。また、形容詞が名詞と一つの単位となっているような場合 (little や young などによく見られる) には名詞の最も近くに置かれる。

an ill-looking little man 「醜い小男」

a lovely little girl 「愛らしい小さな少女」

an honest young fellow 「正直な若者」

■ 主な数量形容詞の用法

(1) 不定数量形容詞の用法

【主な不定数量形容詞】

意味	数	量
たくさん～	many～ (主に否定文・疑問文で)	much～ (主に否定文・疑問文で)
たくさん～	a large number of～	a large amount of～
たくさん～	a lot of～ (肯定文・否定文・疑問文で)	
たくさん～	lots of～ (肯定文・否定文・疑問文で)	
たくさん～	plenty of～ (主に肯定文で)	
少しの～	a few～	a little～
ほんの少しの～	only a few～	only a little～
かなり多くの～	quite a few～	quite a little～
少なからぬ～	not a few～	not a little～
ほとんど～ない	few	little
全くない	no	
いくらかの～	some (肯定文で)	
いくらか～/少しも～ない	any (疑問文・否定文で)	
いくらかの～	several～	
十分な～	enough～	

① many

many は数えることのできる名詞の複数形につけ、「多数の」という意味を表す。口語体では、主に否定文・疑問文で用いられる。too, so, as に続くときや主語に含まれるときは肯定文でも用いられる。

03. He **doesn't** have **many** friends in Okinawa.

(彼は沖縄にはあまり多く友達はいません。)

04. **Does** he have **many** friends in his hometown?

(彼は故郷には友達はたくさんいるのですか。)

05. He has **as many** friends in Okinawa as in his hometown.

(彼は故郷と同じように沖縄にも沢山の友達があります。)

06. He made **six** mistakes in **as many** lines.

(彼は6行中に6個の間違いをした。)

07. I am happy to have **so many** friends.

(私はこんなに多くの友達がいて幸せです。)

08. He has **too many** troubles.

(彼には問題が多すぎる。)

09. **Many** people were killed in the war.

(多くの人々がその戦争で亡くなった。)

Dr. Higgins's room

肯定平叙文の目的語に用いられる many について、綿貫陽・マーク・ピーターセン共著『表現のための実践ロイヤル英文法』(204A)に次のように述べられている。「I have many friends living in England. (私にはイギリスに住んでいる友達がたくさんいる) というように、肯定平叙文の目的語を many で修飾することもある。ただし、こうした形は、たとえば「イギリスに住んでいる友達、いますか」と尋ねられ、「ええ、たくさんいますよ」と答えるように、何かの有無や数がすでに話題に上っているときに使われるのがふつうである。最初から唐突に I have many friends living in England. と言うと、いささか不自然に感じられるのである。」

② much

much は数えることのできない名詞につけ、「(量が) 多量の」・「(程度が) たいへんな」という意味を表す。many と同じように、主に否定文・疑問文で用いられる。too, so, as に続くときや主語に含まれるときは肯定文でも用いられる。

10. **He doesn't eat much breakfast.**

(彼はあまり朝食を食べない。)

11. **Does he have much money?**

(彼はたくさんお金を持っていますか。)

12. **You may take as much time as you want.**

(好きなだけ時間をかけてよろしい。)

13. **He spent so much time and money on his study.**

(彼は自分の研究に非常に多くの時間と金とを費やした。)

14. **He had too much beer.**

(彼はビールを飲み過ぎた。)

15. **Much money makes a country poor.**

(金のあり過ぎは国を貧しくする。)

Dr. Higgins's room

much も many と同じように、肯定文で用いられることは避けられ、a lot of, lots of, plenty of などが用いられる。疑問文では much, many はもちろん a lot of などよく用いられる。特に肯定の答えを期待する場合には a lot of, lots of, plenty of などの方が用いられる。

Dr. Higgins's room

綿貫陽・マーク・ピーターセン共著『表現のための実践ロイヤル英文法』(204B)に「疑問文における much の意味」という題で有益な記述が見られる。ここに簡単に要約すると、例えば、Did you have much interest in English as a child? という英文を見ると、日本人は「子供の頃、英語に大いに興味がありましたか。」と訳したくなるみたいだが、実はそうではなく、これは、Did you have any interest in English as a child? や Did you have an interest in English as a child? に近く、「子供の頃、英語に興味がある程度ありましたか。」というくらいの意味になるという。

③ few

few は数えることのできる名詞の複数形につけ、〈期待していたほどでなく、無いに等しい〉ことを表す。通例「ほとんど～ない」と訳されることが多い。

16. He has **few friends** in Okinawa.

(彼は沖縄にはほとんど友達はいません。)

17. She buys **few goods** at that store.

(彼女はその店ではほとんど商品を買わない。)

18. There are **few people** in the park.

(公園にはほとんど人はいない。)

19. **Few people** live to be 120.

(120 歳まで生きる人はほとんどいない。)

20. **Such examples are few.**

(そのような例はほとんどない。)

④ a few

a few は数えることのできる名詞の複数形につけ、〈期待していたより多く、無いことはない〉を表す。通例「少しある」「少数の」と訳されることが多い。some とほとんど同義的であると考えてよい。

21. He has **a few friends** in Okinawa.

(彼は沖縄には少し友達があります。)

22. She buys **a few goods** at that store.

(彼女はその店では少し商品を買う。)

23. There are **a few people** in the park.

(公園には少し人がいる。)

24. **A Few people** live to be 120.

(120 歳まで生きる人が少しいる。)

25. Do you have **a few minutes**?

(2, 3分よろしいでしょうか。)

Dr. Higgins's room

a few minutes, a few days, a few weeks などを「2, 3分」「2, 3日」「2, 3週」などと日本語に訳すことから類推して、いつでも a few を「2, 3の」と訳せばよいわけではない。a few は「数が少ない」ことを意味しているのであって、「2, 3の」と訳す場合もあるが、いつもそうとは限らない。例えば、A few people voted for A, namely about 180,000. 「少数の人、つまりおよそ 18 万人の人が A に投票した」という文では、書き手（話し手）は 18 万票という獲得数をごく少数とみなしているということである。

⑤ little

little は数えることのできない名詞の単数形につけ、〈期待していたほどでなく、無いに等しい〉ことを表す。通例「ほとんど～ない」と訳されることが多い。

26. He has **little money** in his wallet.

(彼は財布にはほとんど金がない。)

27. She drinks **little milk**.

(彼女はほとんどミルクを飲まない。)

28. I have **little interest** in religion.

(私は宗教にはほとんど興味はない。)

29. There was **little food** during the war.

(戦争中ほとんど食糧はなかった。)

⑥ a little

a little は数えることのできない名詞の単数形につけ、〈期待していたより多く、無いことはない〉を表す。通例「少しある」「少量の」と訳されることが多い。

30. He has **a little money** in his wallet.

(彼の財布には少しお金が入っている。)

31. She knows **a little French**.

(彼女は少しフランス語がわかる。)

32. I have **a little interest** in religion.

(私は宗教に少し興味がある。)

33. **A little learning** is a dangerous thing.

(生兵法は大怪我のもと。)

Dr. Higgins's room

a few や a little の前に only をつけると否定的な意味になり、「ほんの少しの」というふうに、話し手はその数量を少なすぎると考えていることを表す。反対に、quite をつけると、「かなり多くの」、not をつけると、「少なからぬ」という肯定的な意味になる。

Only a few people speak French. (フランス語を話す人はほんの少ししかいない。)

Quite a few people speak French. (かなり多くの人がフランス語を話す。)

Not a few people speak French. (少なからぬ人がフランス語を話す。)

⑦ some と any

不定の数量を表し、正確な数量を表し難い、あるいは正確な数量を表す必要がない場合に用いられる。通例、some は肯定文に、any は否定文、疑問文で用いられる。

34. He has **some friends** in Okinawa.

(彼は沖縄に友達がいる。)

35. He has **some money** in his wallet.

(彼の財布にはお金が入っている。)

36. There are **some apples** on the table.

(テーブルの上りんごがある。)

37. There is **some milk** in the glass.

(ガラスのコップの中にミルクが入っている。)

38. Does he have **any friends** in Okinawa?

(彼は沖縄に友達がいますか。)

39. Does he have **any money** in his wallet?

(彼の財布にはお金が入っていますか。)

40. Are there **any apples** on the table?

(テーブルの上りんごがありますか。)

41. Is there **any milk** in the glass?

(ガラスのコップの中にミルクが入っていますか。)

42. He doesn't have **any friends** in Okinawa.

(彼は沖縄に友達が一人もいません。)

43. He doesn't have **any money** in his wallet.

(彼の財布にはお金が一銭も入っていません。)

44. There aren't **any apples** on the table.

(テーブルの上一つもりんごがありません。)

45. There isn't **any milk** in the glass.

(ガラスのコップの中に少しもミルクがありません。)

Dr. Higgins's room

(a) I want some towels.

(b) I want towels.

(a)と(b)を比べると、どちらも不定数のタオルを表しているが、(a)では意味の重点は数量を表す some にあり、(b)では意味の重点は towels にあり総称的の意味を表している。このように、some が名詞に付くことで意味の重点が some に移動することがあるので注意することが必要である。例えば、名詞が動詞の補語になっている場合には総称的な意味を表すので、some+名詞を置くと非文になる。

(c) These are towels.

(d)* These are some towels.

注) * (アスタリスク) はその文が非文であることを示す。

Dr. Higgins's room

通例、some は肯定文で、any は否定文・疑問文で用いられると説明されるが、これは some が「限定」を表し、any が「非限定」を表すからである。

(a) I have **some** English books. 「私は何冊か英語の本を持っています。」

(b) Do you have **any** English books? 「あなたは何冊か英語の本を持っていますか。」

(c) Do you have **some** English books? 「あなたは英語の本を数冊持っていますか。」

(a) を疑問文にすると、通例、(b) のようになり上のように訳す。この日本語の意味するところは、「何冊でもよいです。今は冊数には興味はありません。たとえ1冊でもよいのです。」となる。一方、(c) のようにすると、その日本語の意味するところは、「数冊持っていますか。1冊では困るのです。複数冊持っているかどうか聞いているのです。」となる。つまり、(b) は相手が英語の本を持っているかどうかということだけを聞いていることになる。それゆえ、(a) の疑問文は (b) であると通例説明される。同じことは否定文についても言える。

(d) I know **some** guests at the party. 「私はそのパーティ参加者の何人かのゲストは知っている。」

(e) I don't know **any** guests at the party? 「私はそのパーティ参加者のどのゲストも知らない。」

(f) I don't know **some** guests at the party? 「私はそのパーティ参加者の何人かのゲストは知らない。」

このように、some が「限定」を表し、any が「非限定」を表すために、some が肯定文で用いられ、any が疑問文・否定文で用いられる。それゆえ、飲食を勧めるときに、疑問文であるけれども「非限定」を表す any ではなく、「限定」を表す some を用いる。

(g) Will you have **some** cake? 「ケーキはいかがですか。」

⑧ 疑問文に用いられる some の用法

〔依頼〕や〔勧誘〕を表す時には some が用いられると説明される。これは〔依頼〕や〔勧誘〕は聞き手に対して真に情報を求める疑問文ではないからである。言い換えれば、〔依頼〕も〔勧誘〕も一種の命令文である。だから、話し手が聞き手に対して肯定的な答えを期待している場合にも any ではなくて some が用いられる。

46. Could I have **some more coffee** please? 〔依頼〕

(もう少しコーヒーをいただけますか。)

47. Won't you have **some more cake**? 〔勧誘〕

(もう少しケーキはいかがですか。)

48. Don't you have **some coffee every day**? 〔肯定の答えを期待している場合〕

(毎日コーヒーを飲むのでしょうか。)

Dr. Higgins's room

〔勧誘〕や〔申し出〕を表す時に、some を用いるのが普通であるが、拒否される可能性のある時には any も用いられる。だから、パーティなどで何も食べていない人を気遣って飲食を勧める場合には、any を用いて、Won't you have any cake? と勧める方が丁寧だと言われる。一方、〔依頼〕を表す時に some を用いず、any を用いると、「頼めばして貰える」という前提を含まないことになり、相手の好意を最初から疑っている失礼な言い方になる。

⑨ 否定文に用いられる some の用法

通例、否定文には some は用いられず、any が用いられると教えられる。それはそれで正しいことであるが、否定文に some が用いられることも当然ある。つまり、完全に否定する場合には any を用い、完全に否定しない場合には some が用いられる。

49. I don't know **any** guests at the party.

(私はそのパーティのゲストの誰も知らない。)

50. I don't know **seven** guests at the party.

(私はそのパーティの7人のゲストは知らない。)

51. I don't know **some** guests at the party.

(私はそのパーティの何人かのゲストは知らない。)

⑩ 肯定文に用いられる any の用法

any は「自由選択の概念」を表し、特定する必要がないことを意味する場合に用いられる。主に肯定文で用いられ、any+Aで「どんな(種類の)Aでも」と訳す。Aには単数名詞が来るが、複数名詞や数えられない名詞でも可能である。通例、現在形で用いられ、特別な場合は除いて、進行形・完了形・過去形とは用いられない。また、can, may, will の助動詞とは用いられるが、「義務」や「強制」を表す must などとは用いられない。

52. **Any** child can do it.

(どんな子供でもそれはできる。)

53. **Any** place is better than this.

(どんな場所でもここよりはまし。)

54. You may come **at any** time.

(あなたはいつでも来てよろしい。)

55. Take **any** book on the shelf.

(棚の上の本ならどれでも取りなさい。)

Dr. Higgins's room

「自由選択の概念」を表す用法は、否定文、疑問文、条件文にも用いられることがある。その場合、通例下降上昇調で発音されるが、形の上では「何らかの」「いくらかの」を表す any とは区別がつかない。

I don't do any work. 「私はどの仕事もしない。」

I don't do any work. 「私はどんな仕事もするわけではない。」

My dog won't eat any food. 「私の犬は少しも食べ物を食べない。」

My dog won't eat any food. 「私の犬はどんな食べ物も食べるわけではない。」

区別を明確にするために just any を用いることによって、部分否定を表すことがある。

My dog won't eat just any food. 「私の犬はどんな食べ物も食べるわけではない。」

⑪ no

no +A で、「ひとつも A はない」「少しも A はない」を表す。A には数えられる名詞、数えられない名詞の両方が可能。数えられる名詞を置くときは単数形、複数形の両方が可能であるが、一般的なことを言う場合には複数形を用い、特定のことを言う場合には単数形を用いる。

56. He has **no friends** in Okinawa.

(彼は沖縄には一人も友達がいません。)

57. There is **no swimming pool** in this hotel.

(このホテルにはプールはありません。)

58. I knocked on the door but there was **no answer**.

(ドアをノックしたが返事はなかった。)

59. I have **no money** with me.

(私は手持ちのお金がありません。)

60. He had **no food**.

(彼には食べるものが少しもなかった。)

61. **No letters** arrived.

(手紙は一通も来なかった。)

Dr. Higgins's room

「no+A」は「not...any+A」に置き換えられるが、「no+A」は格式ばった言い方で、強い否定を表し、「not...any+A」の方が口語的で一般には好まれると説明される。例えば、次の(a)より(b)の言い方が一般的には好まれる。

(a) He has no friends in Okinawa.

(b) He doesn't have any friends in Okinawa.

しかし、強制的か否かという違い以外に、「no+A」は旧情報に用いられ、「not...any+A」は新情報に用いられるという相違点がある。例えば、Bolinger, *Meaning and Form*, (pp.49-55) によれば、(c)は容認されるが、(d)は非文であるという。

(c) When he woke the next morning I heard him scream, 'I can't see anything! I'm blind!'

(d)* When he woke the next morning I heard him scream, 'I can see nothing! I'm blind!'

「朝起きた時に何も見えなくなっている」というのは話し手にとって「新情報」である。だからここでは“can't see anything”が用いられ、“can see nothing”は用いられない。

また一般に命令文においては、聞き手は話し手の命令内容を予想することはできない。つまり聞き手にとって命令内容は「新情報」であるはずだから、「not...any+A」が用いられるのが普通である。

(e) Go take your walk, but don't stumble over any rock. 「外に行きなさい。でも石に躓かないでよ。」

(f)* Go take your walk, but stumble over no rock.

しかし、前提を暗黙の裡に含んでいる命令文では「no+A」が用いられる。

(g) Have no fear. 「恐れるな」(聞き手が恐れている或いは恐れそうな状況で)

Dr. Higgins's room

「no+A」と「not a+A」はどう違うか。

例えば、「この村には病院がない」というのは、次の3通りの表現が可能である。

- (a) There is no hospital in this village.
- (b) There are no hospitals in this village.
- (c) There is not a hospital in this village.

(a)と(b)の違いは、単数形で考えているか複数形で考えているかの違いである。ふつう1つしかないものは単数形で表し、2つ以上あるようなものは複数形で考える傾向がある。この場合、村の大きさにもよるが、どちらでも不自然ではない。(どちらでも不自然でない場合には複数形を用いることが多い。)次に、(a)又は(b)と(c)の違いは何か。通例、there構文や動詞haveを用いて「ものの有無を表す文」において、(a)のように「no+A」を用いるのが一般的であるが、(c)のような「not a+A」を用いると強意的であると説明される。

(a)・(b)の意味:「この村には病院はない。」

(c)の意味:「この村には一軒だって病院がない。」

ところが、S+be動詞の補語として「no+A」がくると、「Sは決してAではない(むしろその反対だ)」という意味になる。それに対して、「not a+A」の表現は「単なる否定」表現である。尤も、notに強勢を置いて、He is *not* a fool. と言えば(印刷の場合にはnotを斜字体で表す)、He is no fool. と同様の意味になる。

(d) He is no fool. 「彼は愚か者ではない。(むしろ利口者だ)」

(e) He is not a fool. 「彼は愚か者ではありません。」(単なる否定)

(f) He is no teacher. 「彼は先生なんて者じゃない。(教える技術なんて持っていないよ)」

(g) He is not a teacher. 「彼は先生ではありません。」(単なる否定)

Dr. Higgins's room

「no+A」のnoとAの間に形容詞が入り「no+形容詞+A」となる場合には、noが名詞のAを打ち消す場合とnoが形容詞を打ち消す場合の2つの場合とがある。例えば、次の(a)と(b)を図式的に説明すると、(a)は(a')のように、(b)は(b')のようになる。

(a) No ordinary boy hates adventures. 「大抵の少年なら冒険は嫌いじゃない。」

(b) He is no ordinary boy. 「彼は非凡な少年だ。」

(a')[No ordinary boy] hates baseball.

(b')He is [no ordinary] boy.

(b)のようにnoと結合し易い形容詞として、common, ordinary, small, little, greatなどをあげることができる。

⑫ several

several +A で、「いくつかの A」(いくつかとは 3~10 くらいの数であり、しばしば、少ないが、それでもまずまずの数であると話し手が感じていることが含意されている) A には数えられる名詞の複数形がくる。

62. He has **several friends** in Okinawa.

(彼は沖縄に幾人か友達があります。)

63. I read the book **several times**.

(私は数回その本を読んだ。)

64. They stayed here **for several days**.

(彼らは数日間ここに滞在した。)

A がすでに先行して現れている場合、several を代名詞的に用いられることがある。また A が定名詞句の場合、several of the A の形で用いることができる。

65. My grandmother and I would often go looking for pine mushrooms. I would often find a few, she would often find **several**.

(祖母と私はよく松茸を採りに行ったものです。私は少し、祖母は何本か見つけたものです。)

66. **Several of the children** are in the garden.

(子どもたちの何人かは庭にいる。)

67. **Several of my friends** live in Tokyo.

(私の友達の何人かは東京に住んでいます。)

Dr. Higgins's room

綿貫陽・マーク・ピーターセン共著『表現のための実践ロイヤル英文法』(Helpful Hint 105) に「不定の数を表す形容詞のニュアンス」という題で有益な記述が見られる。ここにその一部分を要約すると、たとえば、「喜んだ人が何人かいた」を英語で表すと、

(a) Some people were happy.

(b) A few people were happy.

(c) A number of people were happy.

(d) Several people were happy.

などで表すことができる。そしてそのニュアンスの違いは

(a) は「喜んだ人もいた。」

(b) は「喜んだ人もいたが、大した数ではなかった。」

(c)と(d) は「喜んだ人は(数人しかいなかったが、それでも)意外と多かった。」となる。

⑬ enough

enough +A で、「十分な A」A には数えられる名詞の複数形、数えられない名詞の単数形どちらもくることができる。A の後に enough の意味を特定化する for～ や to 不定詞がくる場合もあるが、文脈から明らかな場合には省略される。

68. We don't have enough workers.

(必要な労働者が足りない。)

69. There is enough food for everygody here.

(ここにいる全ての人のための十分は食料があります。)

70. Do you have enough time to finish the work by tomorrow?

(明日までにその仕事を終える十分な時間があります。)

Dr. Higgins's room

形容詞の enough は通例、enough+A のように名詞 A を前から修飾するけれども、場合によっては、A+enough のように名詞 A を後ろから修飾する場合がある。後者の用法は古風な言い方であると言われるが、Robat, *Points of Modern English Syntax*,(pp.132-33) によれば、enough+A が「何らかの目的のためにちょうど足りる数量」であるのに対し、A+enough は「ある結果をもたらすのに必要以上の数量」ということが含意されるという。(小西友七編「英語基本形容詞・副詞辞典」p.596)

(a)They took enough food to last them a week. 「彼らは一週間暮らすに必要な食糧を持って行った。」

(b)They took food enough to last them a week. 「彼らは一週間も暮らせるほどの食糧を持って行った。」

(b)の意味するところは、「2, 3 日の宿泊生活なのに一週間生活できるくらいの必要以上の食糧を持って行った。」というくらいの意味である。

■性状形容詞

(1) 主な性状形容詞の意味

	日本語	形容詞	注 意 事 項
「感情」を表す形容詞	嬉しい	glad	「人が願望を満たしたり、周りの状況に満足したりして得る感情」を表し、「ほっとした喜び」を表す。日本語の「うれしく思う」に匹敵。限定用法・叙述用法ともに可能。限定用法の場合には「うれしそうな」「喜びを感じさせる」となる。人を修飾する限定用法は不可。
		happy	「希望・目標などが達成されて得られる喜びや満足感」を表す。この感情が一時的な場合にも持続的な場合にも使用可能。限定用法・叙述用法ともに可能。限定用法の場合には「幸福そうな」「楽しい～」となる。glad と異なり限定用法で人を修飾できる。 a happy boy 「幸せそうな少年」
	怒っている	angry	「気持ちが激昂し、荒立っている感情」を表す。限定用法・叙述用法ともに可能であるが、物事に対しては、叙述用法は通例不可。
		furious	「抑えることのできない、激昂している状態」を表す。
		mad	mad が「怒っている」を表すのは叙述用法のときのみで、限定用法では「気が狂っている」になる。
	哀しい	sad	「不幸な目に遭って、心を痛めている」状態を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
		depressed	「悲しみに沈んだ状態がある程度継続して、精神的・肉体的にダメージを受けている状態」を表す。
		melancholy	「慢性的に気が滅入っている状態」を表す。
	恐れている	afraid	「怖れている」「怖がっている」を表す最も一般的な形容詞。通例、叙述用法でのみ用いられる。
		fearful	
		scared	afraid が内面的な気の弱さなどが原因で怖がるのに対し、scared は外的な要因によって怖がるのに用いる。
		frightened	恐怖のあまり背筋がぞっとするような怖さを表す。

	日本語	形容詞	注 意 事 項
「評価」を表す形容詞	正直な	honest	「人の性質や行動が正直である」ことを表す。
		sincere	sincere は特に対象に対する誠実さを示す。例えば、「約束に対して誠実」などという時に用いる。
		fair	「規則のもとでの公正さ」を表す。
		frank	この語の中核的意味は「自分の感情や意見を遠慮なく、あるがままに表出している」ことで、「包み隠しのない率直さ」を表す。
	真面目な	serious	「軽薄なところがなく、思慮深く、誤魔化しの気持ちがなく、物事に対して真剣な態度」を表す語で、人に対しては「真面目な」「真剣な」「本気で」などの意味になり、物事に付けば「重大な」「ゆゆしき」となる。限定用法・叙述用法ともに可能。
		grave	「真面目さの中に威厳さを兼ね備えている」語で、態度・表情などの外面的な様子には serious よりも grave が好まれる傾向にある。限定用法・叙述用法ともに可能。
	怠惰な	idle	この語の中核的な意味は「人や事物が一時的あるいは必然的に活動していない状態」を表し、そこから、「人が怠惰な」「物が動いていない」などの意味を表す。idle には非難の気持ちがほとんどない。限定用法・叙述用法ともに可能。反意語は busy。
		lazy	この語の中核的な意味は「仕事や勉強などを継続的に根気よく努力をする気がなく、勢いのない状態」を表す。通例、軽蔑の意味が含まれる。限定用法・叙述用法ともに可能。反意語は diligent。
		indolent	「生まれつきの習性として、苦労や努力を嫌がり、安易さを好む性質」を表す。「無精の」「ものぐさな」。反意語は industrious。
	忙しい	busy	「しなければならないことがあって、暇がない状態」を表す。時や場所にも用いることも多く、その場合には「にぎやかな」「人通りの多い」「活気がある」などとなる。電話回線で用いられると「使用中で」となる。
	暇な	free	「何ものにも束縛されていない状態」を表し、「自由の」「暇な」「無料の」などを表す。
	金持ちの	rich	「物が豊富にある状態」を表し、人に付くと、「金持ちの」「裕福な」。物に付くと、「高価な」「豪華な」。
		wealthy	「単に金持ちであるだけでなく、社会的に立派な地位を占めている」ことを表す。
	貧しい	poor	「物が少ない状態」を表す。そこから、「(金銭的に) 貧しい」「貧乏な」「不十分な」「劣等な」などを表す。

	日本語	形容詞	注 意 事 項
「評価」を表す形容詞	新しい	new	「新しい」を表す語であるが、「買ったばかりの」「新品の」「新任の」「新発見の」などの意味にもなる。また、限定用法で「新生の」叙述用法で「不慣れな」「目新しい」などの意味もある。
		young	この語の中核的な意味は、「生物が誕生して以来の期間が比較的短い」ことを表す。さらに、精神面・肉体面における若者の特徴となる「未熟な」「若々しい」などの意味も表す。
	古い	old	この語の中核的な意味は、「人や動物が誕生して以来、事物が出現して以来現在まで長い年月が経過している」ことを表す。人や動物では「年をとっている」、物では「古い」となる。前者の反意語は young、後者の反意語は new。
	病気の	sick	この語の中核的な意味は、「様々な原因により身体や精神が異常をきたし正常に機能していない」ことを表し、「病気の」「具合が悪い」と訳す。限定用法では、ill より sick が用いられるが、叙述用法では、米語では sick、英語では ill が好まれる。
		ill	この語の本来の意味は、「不道德な」であったが、現在ではその意味合いは弱まり、①「悪意のある」「不吉な」②「病気の」「気分が悪い」の二つの意味にまとめられる。通例、①の意味では限定用法、②の意味では叙述用法で用いる。
	元気な	fine	この語はラテン語の「終り」を表す語に由来し、「仕上げられた」「最も洗練された」の意味から「すばらしい」「見事な」などの意味が生まれた。
		well	形容詞の well は、①「(人が) 元気な」②「(物が) 申し分ない」の意味で、叙述用法で用いられるが、①の意味では限定用法も可能。
	はやい	early	時間の早さに用い、①「早い」と②「初期に」の意味がある。
		fast	「動作や運動が高速度で持続する状態」を表す。「速い」
		quick	動作や運動の速度の速さを表す語であるが、特に「瞬間的で継続性のない動作や運動の速さ」を表す。
		rapid	動作や運動の速度の速さを表す語であるが、瞬間的な運動、継続的な運動にも用いられるが、fast や quick ほどの速度を表さないことが多く、速度も一定していない場合に用いられる。
	おそい	late	late には、①「定刻を過ぎて遅い」、②「1日のうちで時間的にみてより遅い」の二つの大きな意味がある。②の意味からは、「(季節・時代などの) 終り頃の」という意味が生まれた。また、限定用法で、「最近亡くなった」「最新の」の意味もある。
		slow	「動作や行動の速度が望まれるべき速度よりも遅い」ことを表す。人の理解力について「物わかりの悪い」という意味もある。

	日本語	形容詞	注 意 事 項
「性格」を表す形容詞	勇敢な	brave	原義は「野蛮な」であったが、そのうち、野蛮さの中にある「勇ましさ」だけが強調されるようになった。「特に困難な状況でも自制心を失わない勇敢さ」を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
		bold	自ら危険な状況を歓迎するような、「大胆で、向こう見ずな勇猛果敢な性質」を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
		courageous	行動に見られる勇敢さというより、「特に、強固な意志を持って危険や困難に立ち向かう気高い精神」を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
	臆病な	cowardly	単に臆病なだけでなく、「卑怯な」と意味が含まれている。
		timid	「内向的な性格からくる気の弱さ」を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
		faint-hearted	the faint-hearted 「臆病者」で用いられることが多い。
	内気な	shy	「恥ずかしがりの、人見知りする」の意味。限定用法・叙述用法ともに可能。
		modest	「謙虚さ、遠慮がちさを」を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
		reserved	「控えめ、遠慮がちさや打ち解けない」様子を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
		withdrawn	「引っ込み思案で、自ら世間と交わろうとしない」様子を表す。通例、叙述用法で用いられる。
	静かな	quiet	「音があまり聞こえない様子で、静かで穏やかな」様子を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。「静かにしなさい」は“Be quiet.”
		silent	人について用いられると、「口数の少ない、黙っている」の意味になり、場所や物について用いられると、「静かな、音の出ない」の意味になる。限定用法・叙述用法ともに可能。
		still	「動かずじっとしているため、静かな」状態を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。限定用法で、ジュースなどに付けて「炭酸入りでない」という意味もある。still orange juice 「無炭酸のオレンジジュース」
		restrained	「言動が遠慮がちで、もの静かな」様子を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
		tight-lipped	単語が表す通り、「唇を結んだ状態で、口をつぐんだ、口を閉ざしている」状態を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。

	日本語	形容詞	注 意 事 項
「性格」を表す形容詞	うるさい	talkative	「おしゃべりで、よく喋る」という意味。限定用法・叙述用法ともに可能。
		noisy	「いろいろな方面から騒音が聞こえて、騒々しい」様子を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
		loud	「音量が大きくて不快を感じるほどのうるささ」を表すが、“Could you speak louder?” 「もっと大きな声で話して頂けませんか。」のように音量の明瞭さを示す形容詞としても用いられる。限定用法・叙述用法ともに可能。
		annoying	音に限らず、「鬱陶しい」を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
	穏やかな	gentle	「育ちの良さ」から発展して「穏やかな」という意味で用いられるようになった。限定用法・叙述用法ともに可能。
		mild	人や物の内在的性質として強度の激しさが欠如していることを表す語であるため、「恒常的に穏やかである」ことを意味する。限定用法・叙述用法ともに可能。
		calm	「穏やかな」を表す基本語であるが、「冷静な」という意味で使われることも多い。限定用法・叙述用法ともに可能。
		serene	「平静で穏やかな」様子を表す。天候や自然、人の心の状態などについて用いられる。限定用法・叙述用法ともに可能。
	親切な	kind	「思いやりのある行為によって折に触れて示される、特に生まれつきの親切さ」を表す。限定用法・叙述用法ともに可能。
		nice	元来は「愚かな」「鈍い」を表していたが、やがて反応が鈍いことから「気難しい」→「細かいことにうるさい」となり、「細かな」→「上品な」「すてきな」「親切な」という意味を発達させてきた。口語ではよく用いられることばであるため、それだけ意味が曖昧である。明確な内容を伝達したいときは避けるべき形容詞である。
		kindly	kindly には「親切にも」という副詞と「親切な」という形容詞がある。形容詞としてはやや古風な言い方で、通例、年下の者や弱者に対して使う。限定用法で用いるのが普通。
		tender	「細やかな愛情に溢れた優しさ」を表すが、「(肉などが) 柔らかい」という意味も重要である。
	意地悪な	mean	「意地悪な」を表す基本語。
		cold	温度が低いことを表すことばであるが、比喩的に人の言動や気質などを表すのにも用いられ、「思いやりが欠如しており、情け容赦のない冷たい」態度を表す。
		nasty	「意地悪な」の他に、味や匂いについて、「不快な」「まずい」。

	日本語	形容詞	注 意 事 項
「性格」を表す形容詞	愛想のいい	friendly	名詞の friend から派生してできた形容詞。人間や動物に用いると「愛想のよい」「人なつっこい」、国に用いると「友好的な」と訳すのがよい。限定用法・叙述用法ともに可能。
		sociable	他の人々と交際を好む気質を表し、「交際好きの」「愛想のよい」「社交的な」などを意味する。
		amiable	主に書き言葉で用いられる語であり、「感じのよい」「気立てのよい」など、人に対して非常に好意的な態度を表す。
	陰気な	glum	人や人の表情に関して「陰気な」「憂鬱な」「不機嫌な」。
		blue	元来、空や海の青い色を表す語であるが、「恐怖」・「不快」・「不安」を暗示する色でもあり、比喩的に「憂鬱な」「陰気な」を表す。
		gloomy	人や人の表情・考え方に関して「陰気な」「憂鬱な」「悲観的な」を表す。場所に付くと「薄暗い」、空に付くと「暗い雲に覆われた」などとなる。
	性急な	impatient	「性急な」を表す場合は限定用法で用いる。叙述用法では、「いらいらしている」などの意味になる。
		quick	「人や物の動作の速度が望まれる速度より速い」というのが基本的意味である。比喩的に人の理解力について「理解が早い」「利口な」の意味になり、人の性質について「性急な」「短気な」という意味になる。
	頑固な	stubborn	人に用いて「頑固な」「頑なな」。物に用いて限定用法で「扱いにくい」「手におえない」。病気に付くと「治りにくい」などと色々な意味に変わる。
		obstinate	人に用いて「頑固な」「意地っ張りな」。物に用いて「(汚れや染みが) なかなか落ちない」。病気に付いて「治りにくい」。
		difficult	人に用いて限定用法で「気難しい」「扱いにくい」となる。例えば、 a difficult man で「気難しい人」となるが、 a hard man は「冷酷な人」となるので注意。
	忍耐強い	patient	この語の中核的な意味は、「人が肉体的な苦しみや災難・困難などに際して、不平をもらさず静観して成り行きを見守っている」ことを表し、通例「忍耐強い」「我慢強い」などと訳す。
		tolerant	patient が「静観して成り行きを見守る辛抱強さ」というような受動的な態度を表すのに対し、 tolerant は、「そのように耐えなければならない事情を許すことのできる」心の寛容さを表す。「寛容な」「寛大な」という日本語訳になる。

	日本語	形容詞	注 意 事 項
「形」を表す形容詞	大きい	big	「大きい」を表す最も日常的な語であるが、「驚き」などの主観的な感情を込められて用いられることが多い。a big city 「大都会」
		large	「物の形状・面積・容量が標準よりも大きい」というのが基本的な意味である。しばしば big と交換可能であるが、big のような主観的な意味合いはなく、客観的物理的な大きさに限定される。また、量、金額などの数えられない抽象名詞と共に用いられる。a large company 「大企業」、a large income 「多額の収入」
		great	通常、物理的な「大きさ」について用いられることはないが、「素晴らしい」「偉大な」のような主観的な感情を込めて使うことがある。また、目に見えないような抽象名詞と共に用いられる。a great man 「偉人」、a great sorrow 「大きな悲しみ」
	小さい	small	大きさ・容量・額・規模・価値などが標準を下まわることを表し、通例、「同種の他の物と比較して小さい」ことを表す語である。large の反対語である。限定用法・叙述用法ともに可能。
		little	単に「小さい」を表すだけでなく、「標準を極端に下回る」ことを表し、「可愛らしさ」「未成熟さ」「卑しさ」のような主観的な感情が込められている。big や great の反意語で、種々の感情的意味合いを含む主観的な語である。叙述的に用いることもあるが、一般的には限定用法で用いる。
		tiny	「極単に小さい」ことを表し、そこには話者の「驚き」の気持ちが含まれている。「超小さい」という日本語の感じ。
	高い	high	垂直方向の位置の高さに重点を置きつつ、その大きさにも言及する。しかし、人の身長について用いることはできない。人の身長について言及するときは、tall を用いる。日本語の「高い」は垂直方向でなくても用いる。例えば、「高い鼻」と日本語で表現するが、英語では a long nose, a large nose, a big nose などと表現する。
		tall	「高く伸びたり、そびえたりしており、高さに比べて幅が狭く、細長い状態」を言う。従って、通例、山などには tall ではなく high が用いられるが、山の形次第では tall も可能である。富士山などは tall でも良いという意見もある。
	低い	short	この語の基本的な意味は「距離及び時間の長さが標準や平均を下まわり短い」であるが、人などに付くと「背丈が低い」となり tall の反意語となる。
		low	物の背丈や高さが垂直方向に低いことを表す。人の背丈が低いことは、short を用いる。

	日本語	形容詞	注 意 事 項
「形」を表す形容詞	長い	long	「距離や時間の長さが標準や平均よりも長い状態」を表す。また、心理的に長く感じられる場合にも用いられ、「長ったらしい、退屈な」という意味もある。
		lengthy	時間の長さについて用いられることもあるが、主に「(演説・書き物・文体などが) 長ったらしい、退屈な」という意味合いで用いられる。
	短い	short	「距離や時間の長さが標準や平均よりも短い状態」を表す。「(距離や時間が) 短い」の他に、「(量・重さ・金額などが) 不足している」、「(話・説明・文体などが) 簡潔な」などの意味もある。
		brief	時間的に「短い」という意味で用いられるが、通例、空間的に「短い」という意味では用いられない。
	広い	wide	「物の両端間の距離や長さが大きい」ことを表す。broad が物の両端間の平面的広がり重点があるのに対し、wide は物の両端間の距離に重点がある。限定用法・叙述用法ともに可能。
		broad	この語の中核的な意味は、「何にも遮られることのない広々とした広さを有する」ことを表し、比喩的に「(知識・教養・経験・趣味などの) 範囲が広い」「(見解・見識・視野・度量などが) 広い」の意味がある。限定用法・叙述用法ともに可能。
		large	「物の形状・面積・容量が標準よりも大きい」というのが基本的な意味であるので、「広い部屋」などを表すときは large を用いる。
	狭い	narrow	この語は wide の反意語として「(幅が) 狭い」、broad の反意語として「(見解・見識・視野・度量などが) 狭い」などの意味がある。面積や容量に関して「狭い」を表現する場合には narrow ではなく small を用いる。「狭い部屋」は a small room となる。
		small	「空間の狭さ」について言及する時には small を用いる。
		cramped	「圧迫感のあるような狭苦しい」場合に用いる。「(部屋・建物などが) 狭い、窮屈な」 cramped conditions 「すし詰め状態」。
	細い	thin	この語の中核的な意味は、「ある物体の表面から反対側の表面までの間隔が普通より小さい」ことを表す。一般的には thin = 「薄い」と訳しがちであるが、「物体が平板状の場合には「薄い」となり、物体がひもや棒状の場合には「細い」という日本語になる。例えば、a thin wire 「細い針金」、a thin rope 「細いロープ」、a thin finger 「細い指」など。また、人や動物に用いられると、「やせこけた」「やつれた」の意味でも使われる。

	日本語	形容詞	注 意 事 項
「形」を表す形容詞	細い	fine	この語はラテン語の「終り」を表す語に由来し、「仕上げられた」「最も洗練された」の意味から「すばらしい」「見事な」などの意味が生まれ、さらに物や感覚の細密さを示し、「細かい」「細い」「繊細な」「鋭敏な」の意味でも用いられる。a fine hair「細い毛」、a fine thread「細い糸」、a fine pen「細字用ペン」
		slim	この語は通例、女性の身体や身体の一部が細いことをほめて使われる言葉で、「ほっそりした」「細い」「スリムな」などと訳される、時に、男性の引き締まった魅力的な体型にも用いられる。
		slender	この語は通例、女性の身体や身体の一部が細いことをほめて使われる言葉で、「ほっそりした」「すらりとした」などと訳される、男性に用いられると女性っぽさを暗示することになる。
		skinny	この語は通例、人の身体や身体の一部が細すぎることをけなして使われる言葉で、「痩せこけた」「ガリガリに痩せた」「骨と皮ばかりの」などと訳される。
		lean	この語は通例、人・動物の身体や身体の一部が筋肉質で引き締まっていることをほめて使われる言葉で、「細い」「引き締まった」などと訳される。主に男性や動物に用いられる。
	太い	thick	この語は thin の反意語であり、その中核的な意味は、「ある物体の表面から反対側の表面までの間隔が普通より大きい」ことを表す。一般的には thick = 「厚い」と訳しがちであるが、「物体が平板状の場合には「厚い」となり、筒状の物体の直径の間隔が大きいものについて、「太い」と訳される。例えば、a thick wire「太い針金」、a thick rope「太いロープ」、a thick finger「太い指」など。
		fat	この語の中核的な意味は「人や身体の一部が通常の状態より脂肪が付き過ぎている」ことを表す。動物にも用いられるが、その場合には「(食肉用に) 太らされた」という意味になる。「デブ」という軽蔑的な響きを感じられる語である。thick が身体の一部にしか用いられないのに対して、fat は身体の一部にも人自身にも用いられる。
		plump	女性や赤ちゃんによく用いられ、「ぽっちゃりとした」「ふっくらした」などの日本語に相当する。ほめ言葉的な形容詞である。
		stout	胴回りが大きく、がっしりとした健康的な特に中年や初老の人に対して用いる言葉であり、fat の婉曲語としてよく用いられる言葉でもある。「かっぷくの良い」「どっしりした」「がっしりした」などの日本語があてられる。

<<< 参考図書 >>>

- 『英語基本形容詞・副詞辞典』小西友七編 (1989年発行 研究社)
- 『英文法シリーズ 特製版 第一集』大塚高信 岩崎民平 中島文雄監修 (1977年第13版発行 研究社)
- 『英語教師の文法研究』安藤貞雄著 (1984年再版発行 大修館書店)
- 『徹底例解ロイヤル英文法』綿貫陽 宮川幸久 マーク・ピーターセン 他共著 (2002年発行 旺文社)
- 『表現のための 実践ロイヤル英文法』綿貫陽 マーク・ピーターセン共著 (2006年発行 旺文社)
- 『英文法解説』江川泰一郎著 (1964年改訂新版発行 金子書房)
- 『英文法解説』江川泰一郎著 (1991年改訂第3版発行 金子書房)
- 『英文法総覧』安井稔著 (1996年改訂版発行 開拓社)
- 『英文法の問題点』デニス・キーン 松浪 有 共著 (1969年発行 研究社)
- 『英語の素朴な疑問に答える 36章』若林俊輔著 (1990年発行 The Japan Times)
- 『ネイティブスピーカーの単語力 3形容詞の感覚』ポール・マクベイ 大西泰斗共著 (2003年発行 研究社)
- 『ネイティブが教える英語の形容詞の使い分け』デイビッド・セイン 古正佳織里共著 (2013年発行 研究社)
- 『第3版オックスフォード[®] 実例現代英語用法辞典』Michael Swan 著 吉田正治訳 (2007年発行 研究社/オックスフォード[®] 大学出版局)
- A Practical English Grammar, Thomson, A.J. and A.V. Martinet (1986⁴, Oxford University Press)*
- 『第4版 実例英文法』AJ トムソン/AV マーティネット著 江川泰一郎訳注 (1988年発行 オックスフォード[®] 大学出版局)
- 『現代英米語用法事典』安藤貞雄 山田政美編著 (1995年発行 研究社)
- 『ウィズダム英和辞典 第3版』井上永幸 赤野一郎編 (2013年発行 三省堂)
- Meaning and Form, Bolinger, D. (1977, Longman Group Ltd)*